



Data

監督：ドゥニ・ヴィルヌーヴ
脚本：ハビエル・グヨン
原作：ジョゼ・サラマーゴ『複製された男』（彩流社刊）
出演：ジェイク・ギレンホール／メラニー・ロラン／サラ・ガドン／イザベラ・ロッセリーニ／ジョシュ・ピース／ティム・ポスト／ケダー・ブラウン／ダリル・ティン

👁️👁️ みどころ

『灼熱の魂』（10年）、『プリズナーズ』（13年）と、素晴らしい作品を生み出し続けているドゥニ・ヴィルヌーヴ監督作品は必見！そう思ったが、『キネマ旬報』の評価は「ラストには失笑した。策に溺れ過ぎたか」と意外に低い。しかして、あなたの評価は？

この世に、自分と同じ人間が・・・？そんな小説や映画は多いが、ノーベル文学賞受賞作を原作とした本作は、邦題だけではなく『ENEMY』という原題からも読み解く必要がある。

近い将来、クローン人間を作り出すことは技術的に容易だろうから、今から夢の世界で、想像の世界で訓練しておけば……。ひょっとして、そんな見方もあり・・・？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ドゥニ・ヴィルヌーヴ監督作品！それだけで必見！■□■

私は、カナダ出身のドゥニ・ヴィルヌーヴ監督の名前を『灼熱の魂』（10年）（『シネマルーム28』62頁参照）ではじめて知り大いに感動したが、今年5月5日に観た『プリズナーズ』（13年）も面白い映画だった。本作のパンフレットにある高橋諭治氏（映画ライター）のコラム「人間の謎とその複雑な真実を探求し続けるドゥニ・ヴィルヌーヴの映像世界」を読めば、ドゥニ・ヴィルヌーヴ監督の「映像世界」がよくわかる。「まるで“映画の神”が舞い降りてきたかのように、次から次へとハイペースで独創的な映画を撮りまくっているこのカナダ人監督は、今まさにクリエイターとして多作の時期にあり、まぎれもなくキャリアの絶頂期のまっただ中にある」ようだ。そんなドゥニ・ヴィルヌーヴ監督の

最新作だけに、こりゃ必見！

『プリズナーズ』が2時間33分という長尺になったのは、もともと難解なテーマであるうえ、失踪した少女を必死になって捜す（法的に禁止された自力救済を目指す）父親ケラー役を演ずるヒュー・ジャックマンと、犯人の他にこの父親も捜査の対象とせざるをえなくなったロキ刑事役を演ずるジェイク・ギレンホールという2人の俳優のぶつかり合いになったためだ。『プリズナーズ』でドゥニ・ヴィルヌーヴ監督とはじめて組んだジェイク・ギレンホールが、ドゥニ・ヴィルヌーヴ監督からの本作のオファーに快諾したのは当然だ。

そう思い、「満を持して」本作の公開を待っていたところ、『キネマ旬報』2014年8月上旬号の「REVIEW鑑賞ガイド」を見ると、3人の評論家が3点、2点、3点と低い点数をつけていた。あれれ・・・？もちろん、本作を観る前だから、そこに書かれている短い評論を読んでもその意味はよくわからなかったが、そう言われると、余計観てみなければ・・・。

■□この世に、自分と同じ人間が・・・？■□

自分の「そっくりさん」がこの世に存在する。そんな物語は世界にたくさんある。マーク・トウェインの『王子と乞食』（188



©2013 RHOMBUS MEDIA (ENEMY) INC. / ROXBURY PICTURES S. L. / 9232-2437 QUEBEC INC. / MECANISME FILMS, S. L. / ROXBURY ENEMY S. L. ALL RIGHTS RESERVED.

1年)は昔から有名な小説だし、若き日のレオナルド・ディカプリオが主演した『仮面の男』（98年）は、アレクサンドル・デュマの『ダルタニャン物語』をベースに、ルイ14世と鉄仮面伝説、老いた三銃士の復活と活躍、王妃とダルタニアンとの秘めた恋を描いた娯楽映画だった。日本でも、黒沢清監督の『ドッペルゲンガー』（03年）はユーモラスだがちょっと恐い分身＝ドッペルゲンガーを描いた映画だった（『シネマルーム3』347頁参照）。また、『チャップリンの独裁者』（40年）は、第1次世界大戦に従軍、負傷して記憶を喪失したユダヤ人の床屋（チャールズ・チャップリン）が、独裁者となったヒンケル（チャールズ・チャップリン）にまちがえられて歴史的な大演説をする、というすごい映画だった。

他方、遺伝子分解の研究が進んだ現在、クローン牛は当然のものとされているから、近い将来はクローン人間の誕生も・・・。かつて、武田信玄や徳川家康は暗殺者から自分の

身を守るため「影武者」をつくったが、黒澤明監督の『影武者』（80年）を観ればわかるとおり、そこには大変な苦勞があった。しかし、遺伝子の研究が進めば、人間だってクローンをつくるのは簡単なこと。すると、近い将来世の中は「複製された男」があちこちに…。

■□■原作はノーベル文学賞作品！それをいかに映像に？■□■

去る4月17日、コロンビアのノーベル文学賞作家ガブリエル・ガルシア＝マルケス（1928年—2014年）が満86歳で死亡した。2011年7月26日に私の事務所で対談した中国人のノーベル文学賞作家・莫言さんの口から彼のことは聞かされていたので、「魔術的リアリズムの旗手」と呼ばれた彼の名前と、『百年の孤独』『コレラの時代の愛』という作品は、私もよく知っている。しかし、寡聞にしてポルトガル唯一のノーベル文学賞作家ジョゼ・サラマーゴ（1922年—2010年）の名前は全く知らなかった。

本作の原作は、そのジョゼ・サラマーゴが2002年に発表した長編小説『複製された男』。もっとも、彼の名前は覚えていなくても、彼の原作『白の闇』を映画化した『ブラインドネス』（08年）（『シネマルーム21』297頁参照）のことはよく覚えていたから、一応ジョゼ・サラマーゴの名前はその時に知っていたことになる。『白の闇』を映画化した『ブラインドネス』もかなりの社会問題提起作だったが、原題を『ENEMY』とし、邦題は原作のままとした本作も『ドッペルゲンガー』と同じようなちょっと恐ろしい問題作。本作のパンフレットにはいろいろと小難しいコラムが収録されているが、ノーベル文学賞作品の映画化ともなれば仕方ないだろう。もっとも、本作のテーマは原作と同じらしいが、それを観客に見せるためのテクニックは映画監督特有のものがあるはずだ。しかして、ドゥニ・ヴィルヌーヴ監督は、「映像作家」としてそれをどのように表現？

■□■冒頭の怪しげな雰囲気は？全編通じた映像美に注目！■□■

7月20日に観たアレハンドロ・ホドロフスキー監督の『リアリティのダンス』（13年）は抽象的で考えさせられる映画だったが、本作もそう。映画は冒頭、暗い色調の中で、怪しげな雰囲気のセックスクラブの様子が描かれる。これをもっと明るくし、堂々と見せれば、団鬼六原作の『花と蛇』シリーズのような官能的展開になるはずだが、それほどのサービス精神のない（？）ドゥニ・ヴィルヌーヴ監督は怪しげな雰囲気をチラリと見せるだけで、次のシーンに移っていく。

大学講師で歴史を教えるアダム・ベル（ジェイク・ギレンホール）は善良で平凡そうな男だが、恋人のメアリー（メラニー・ロラン）との夜な夜なのセックスはきっちりやっている様子。『イングロリアス・バスターズ』（09年）（『シネマルーム23』17頁参照）ですぐにその顔を覚えたフランス生まれの美人女優メラニー・ロランは、その後『オーケストラ！』（09年）（『シネマルーム24』210頁参照）、『人生はビギナーズ』（10年）（『シネマルーム28』200頁参照）、『黄色い星の子供たち』（10年）（『シネマルーム

27』118頁参照)、『グランド・イリュージョン』(13年)、『シネマルーム32』241頁参照)に出演しているが、残念ながら「これぞ!代表作!」と言えるものはまだない。そんなメラニー・ロランが本作では、ほんの短いシーンだがアダムとの「濡れ場」ではかなり大胆な肢体を見せてくれるので、それにも注目!

メアリーとの夜な夜なのセックスに励みながら、アダムの夢の中にはあんな風に怪しげなセックスクラブの姿が登場してくるとなれば、実はアダムはかなりのスケベ男・・・?そしてまた、現実と夢との区別がつかない男かも・・・?

それはともかく、本作では全編を通じてドゥニ・ヴィルヌーヴ監督が作り出す、暗い色調の中での映像美と怪しげな雰囲気に注目!

■□■一人二役はやる方も大変だが、見る方も・・・■□■

アダムが友人からのお薦めビデオの中で見つけた、「そっくりさん」は、ホテルのボーイ役という端役だったが、なぜ、この男はこんなに俺に似ているの?そう気になったアダムがダニエル・センクレアという芸名の俳優、アンソニー・クレア(ジェイク・ギレンホール)をネットで調べ、過去の出演作をビデオで観てみると、やはり気味が悪いほどそっくりだ。そこで「世の中には俺にそっくりな男もいるもんだ」と笑い飛ばせば、小説にも映画にもならないが、どうしても気になるアダムがアンソニーの住所を訪れてみたり、電話をかけてみたりしたところから、ノーベル文学賞を受賞した本作の何とも奇妙な物語が進行していくことになる。

ひげもじゃの外国人はもともと日本人にはその風貌の区別をつけにくいから、そもそも私には大学講師のアダムと売れない映画俳優のアンソニーの区別がつきにくい。真面目タイプのアダムに対してやんちゃタイプのアソニーという区別で、ジェイク・ギレンホールはアダムとアンソニーの2人を演じ分けている。しかし、全く同じ風貌、全く同じ声で、2人の男を演じ分けるジェイク・ギレンホールは大変だ。同時に、アンソニーの妻で今は妊娠6カ月のヘレンがアダムからかかってきた電話をアンソニーと聞き違えたほどだから、見ている観客もアダムとアンソニーの2人を見分けるのは大変だ。服装が違い、住むマンションが違っていても、姿かたちはまさに瓜二つだから、もしこの2人が「ご対面」となれば・・・。

■□■胸の傷まで同じとは・・・!■□■

アダムとアンソニーが初めて話したとき、アンソニーはその電話を誰かのいたずら電話と捉えたのは当然。したがって、その電話について、妻のヘレンから浮気を疑われるような追及をされると、頭に来たのは当然だ。しかして、アダムとアンソニー2人の「ご対面」が実現したのはホテルの一室だが、そこで2人は互いにどんな感情を・・・?



©2013 RHOMBUS MEDIA (ENEMY) INC. /ROXBURY PICTURES S. L. /9232-2437 QUEBEC INC. /MECANISMO FILMS, S. L. /ROXBURY ENEMY S. L. ALL RIGHTS RESERVED.

そこで興味深いのは、本作の原題が『ENEMY』（敵）とされていることだ。アメリカでの原作のタイトルは『The Double』（生き写し、瓜二つ）だから、これは邦題の『複製された男』と同じような意味だが、「ENEMY」とは一体誰を指しているの？こんな不思議な現象に遭遇した場合、誰もが持つ合理的な疑問は、「ひょっとして自分には双子の兄弟がいるのでは？」ということだ。そんな疑問は、母親に直接ぶつけてみれば、それなりの回答は得られるはず。そんな風に考えていると、スクリーン上でもアダムが自分の母親のキャロライン（イザベラ・ロッセリーニ）にそんな質問をするシークエンスが登場したから納得。しかし、キャロラインの回答は「全面否定」だったし、その回答姿勢には何の疑問も感じられなかったから、この映画自体がすべてアダムの妄想・・・？

そんな錯覚すら覚えながら、中盤の展開を見ていると、アダムとアンソニーの「ご対面」が実現した後は、アンソニーがアダムを一方向的に脅迫していくストーリー展開に……。そんな展開になると、真面目タイプのアダムはやんちゃタイプのアンソニーに押され気味になるのは当然だが、そこでのアンソニーの要求は一体ナニ？この展開を見ていると、なるほど本作の原題を『ENEMY』としたことに納得！

■服と車を貸せ。それで終わりにしてやる。その意味は？■

アンソニーのアダムに対する抗議の趣旨は、「お前が登場して、俺の女房に電話したため、夫婦仲に亀裂が生じた」。そこで主張される具体的要求は、「だからお前の服と車を貸せ、それで終わりにしてやる」というものだが、さてその真意は？私たちには、サングラスをかけてヘルメットを被り、バイクに跨ってメアリーをストーカーのようにつけていくシーンが用意されているから、アンソニーのこのセリフは、自分がアダムに成り代わってメアリーとベッドインをすることだとすぐにわかる。しかし、アダムにはこの言葉の意味はすぐに理解できなかったようだ。しかも、ドゥニ・ヴィルヌーヴ監督はその点についてもサービス精神が悪く（？）、アダムとアンソニーの話し合い（交渉？）の様子を見せてくれないから、「合意成立」となった経過は想像するしかない。

アダムとメアリーの関係は肉体関係こそ続いていたが、どうも終局が近づいている感じ。したがって、いかにアンソニーがアダムの服を着てアダムの車に乗り込んでも、メアリーをうまくホテルに連れ込めるかどうかはわからない。ところが、ドゥニ・ヴィルヌーヴ監督が描くその展開を見ていると、アンソニーはうまくアダムに成りおかせたらしい。なぜなら、今某ホテル内のベッドから聞こえてくるのはメアリーのあえぎ声だからだ。ところが、次の瞬間、メアリーの口から「あなたの指に、なぜ指輪の跡があるの！」という絶叫が・・・。

さあ、これはコトだ。さて、この悪夢のような現実(?)に、メアリーはいかなる対応を?そして、99%は成りすましに成功しセックスまで交わしながら、そんなつまらないこと(?)で「あなた、一体誰?」と言われてしまったアンソニーは、それに対していかなる対応を?

■□■そっちがそっちなら、こっちだって・・・■□■

人間は誰にでも「変身願望」がある。したがって、自分が自由に特定の誰かに変身することができることがわかれば、誰だってそれを有効に試してみたいと考えるのは当然だ。そんな目でアダムを見ていると、決してアダムはアンソニーに脅かされてイヤイヤ自分の服と車をアンソニーに貸したわけではないことがわかってくる。つまり、そっちがそっちなら、こっちだって・・・ということだ。

もっとも、アダムにとって魅力的な女性メアリーは、アンソニーにとっても魅力的な女性であることは明らかだが、妊娠6カ月というアンソニーの妻ヘレンに対してアダムは一体何を狙うの?一つ具体的に考えられるのは、アンソニーの財産だが、そんなコソ泥みたいなことをやっても、犯人は誰かすぐにわかるはずだから、全く無意味。そうだとすると、アダムは一体何のために一人で誰もいないアンソニーの家の中に入り、アンソニーに成りすまして座っているの?そして、ヘレンが帰ってきた後、アンソニーに成りすまして、下手なお芝居を続けているの?ここらあたりが本作のミステリアスな部分であり、奥深いところだ。さらに、そこにはいつ勝ち誇ったかのような顔をしたアンソニーが戻ってくるかもしれないという危険があることをアダムは知っているはずだから、あまり長くくつろぐこともできないはず。しかして、スクリーン上に見るあつと驚くその後の展開は・・・。

ドゥニ・ヴィルヌーヴ監督はベッドで一緒に眠ろうとするアダムとヘレンのセックスシーンをモロに見せるわけではないが、それを連想させるやりとりはうまく見せていく。その中で、ヘレンの「学校は?」というセリフも登場させるから、アダムにも観客にもヘレンが目の前にいる男は本物のアンソニーではなく、アダムがアンソニーに成りすましていることはわかるはず。なのに、ヘレンは一体なぜこんな行動を?さらに、アンソニーに成りすましているアダムはコトがバレたとわかりつつ、なぜそんな行動を?そんなこんなを考えていくと、本作はワケのわからないことばかり。でも、それが結構面白い・・・?

■□■私は蜘蛛は大嫌いだが・・・■□■

前述したアレハンドロ・ホドロフスキー監督の『リアリティのダンス』は、スクリーン上の少年の側に約60年後のご本人が登場する等、とにかく「何でもあり!」の技法が目立っていた。そしてそれは、どこまでが現実で、どこからが想像かの境界がハッキリしない本作も同じで、ある時は高層ビルが林立する街の中に、突如火星人のような巨大な蜘蛛の姿が登場する。また、冒頭のセックスクラブのシークエンスでは、女性が舞台上に置かれたクロシェを開けると、銀皿の上から小さな蜘蛛が這い出し、それをグシャリとハイヒールのヒールで踏みつぶすシーンが登場するが、それが踏みつぶす女性も、それを見ている観客も快感・・・?ちなみに、天狗の鼻は男性器のシンボルだし、大人のおもちゃ屋に行けば女性器を象徴するあの手のこの手のグッズが山ほどある。しかして、ドゥニ・ヴィルヌーヴ監督が本作に登場させるこの蜘蛛は一体ナニを象徴しているの?

ドゥニ・ヴィルヌーヴ監督の『ブリズナーズ』は2時間33分の長尺だったが、本作は90分と短尺。さて、アンソニーの本性がバレたことによってメアリーとケンカ別れになった後の2人の展開は?また、アダムとヘレンがどこまでホント、どこからウソという絶妙なバランスの中で共に一夜を過ごした後、2人はどんな展開に?そんな想像をいろいろしながらスクリーンを見ていると、アンソニーとメアリーは大変な事態に。他方、ヘレンが居るはずの部屋の中でアダムが発見したのは、巨大な蜘蛛。そして、それをクライマックスとして本作は突如ジ・エンドとなることに。この結末は一体ナニ?私を含めてこのエンディングに疑問を持つ人は多いはずだ。

現に、『キネマ旬報』2014年8月上旬号の「REVIEW鑑賞ガイド」でも、ドゥニ・ヴィルヌーヴ監督作品としては珍しく、3人の評論点数は3点、2点、3点と低い。とりわけ、2点しか付けていない筒井武文氏は「あざとい象徴を入れたのは、失敗。ラストには失笑した。策に溺れ過ぎたか」と書いているが、さて、あなたの評価は?



複製された男 (12月24日発売)

Blu-ray 5,184円 DVD 4,104円

発売元: バップ

提供: クロックワークス、ニューセレクト

©2013 RHOMBUS MEDIA (ENEMY) INC./ROXBURY PICTURES

S. L./9232-2437

QUEBEC

INC./MEGANISMO

FILMS, S. L./ROXBURY ENEMY S. L. ALL RIGHTS RESERVED.